

2016年7月3日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 20 章 14～26 節

説教：主のゆずりの地は滅ぼされない

あらすじ

今日の箇所には人の首が城壁の上から投げ落とされたという話が出て来ます。ここにどんな恵みがあるというのでしょうか。聖書は私たちの救いのために書かれたというのであれば、きっとこの所にも恵みがあるはずで、そのことを考えていきます。

イスラエルは、王であるダビデにつく者たちと、王の息子であったアブシャロムにつく者たちとの二手に分裂し、同じ民族同士で血を流す戦いが起きました。結局、アブシャロムが倒れたことで戦いは止むのですが、混乱は簡単にはおさまりません。ダビデに恨みを持っていたシェバという男が、ダビデに従ってはならないと国中にデマを流しています。このまま見過ごすしておくなら、イスラエルはもっとひどい戦争状態になります。ダビデは、すぐに部下を派遣してシェバを討ち取るように命令を出します。その部隊にいたのがヨアブという人物です。

1 ヨアブと知恵のある女

1) 城壁破壊作戦

ヨアブはシェバを追ってアベル・ベテ・マアカという町にやってきました。当時、イスラエルの町は盗賊や外敵から町を守るために、町の周りには城壁が巡らされていました。門が閉じられてしまうと、町の中に入ることができません。そこでヨアブは町に向かって壘を築き、城壁を力づくでこわし、そこから町に入る作戦を立てます。もしそうなったらどうなるのでしょうか。シェバを討ち取るこ

とはできるかも知れませんが、町を守るものがなくなるのですから、すぐに盗賊がやってくるまで町は略奪され人々は殺されてしまいます。

ヨアブは、もちろんそのことも考えたはずで、けれども、もしここでシェバを取り逃がしてしまったなら、イスラエルは内戦状態に陥り、多くの死者が出ます。理想など言っていられない。現実、やるかやられるか、ふたつにひとつ。アベルが犠牲になるのは望ましいことではないが、やむを得ない。おそらく今でも多くの政治家はヨアブと同じ判断をするかもしれません。

2) 平和を求める心と神への忠実な信仰

神はどのように判断するのでしょうか。そのことを、ここに登場する知恵のある女のことをとおして見てまいります。この女性はこうヨアブに語りかけます。18 節、19 節。「昔、人々は、『アベルで尋ねてみなければならぬ』と言って、ことを決めるのがならわしでした。私は、イスラエルのうちで平和な、忠実な者のひとりです。あなたは、イスラエルの母である町を滅ぼそうとしておられます。あなたはなぜ、主のゆずりの地を飲み尽くそうとされるのですか。」

このことばは、説明がなければわかりにくいところがあります。二つあります。まず一つ目。この女性は自己紹介するとき、「私は平和な者です。私は忠実な者」と言っているように聞こえます。こんなことを言うのはよほどの自信過剰な人です。どうしてこんなこ

とを言うのか。

そして二つ目にわかりにくいのは、「主のゆずりの地」ということば。アベルには他の町にはない特殊な事情があったようです。この女性が平和な者、忠実な者と言っている事もそれと関係がありそうです。

3) アベルで尋ねてみなければならない

考える糸口は、「アベルで尋ねてみなければならない」ということわざにあります。具体的なことはわからないのですが、昔アベルの町の人々に大きな問題が降りかかったとき、人々は知恵を働かせて解決した。いったいどんな知恵で解決したのかと興味湧きますがそのことは書かれていません。代わりに、その知恵がどのようにして与えられたのかについては、触れています。平和を追い求める心。神に忠実でありたいという信仰。そう言ってます。

アベルの町の人たちが、神は平和の神であることを信じ、神に忠実である者を必ず神は救ってくださる。そのような信仰をもって試練に立ち向き合っていた時、神はこの町を救って下さいました。イスラエルの人々はそんなアベルを見て、あの町には本当の信仰がある。自分たちもアベルから学ばなければならないと思うようになります。そのことが、やがて「アベルで尋ねてみなければならない」ということわざになっていきました。

そんな歴史を持つアベルに住む女がヨアブが訴えます。19節後半。「あなたはイスラエルの母である町を滅ぼそうとしておられます。あなたはなぜ、主のゆずりの地を、飲み尽くそうとされるのですか。」信仰によって神に救われた町を、あなたはひとりの男のために滅ぼしてよいのか。そのように問いか

け、ヨアブの決断を促します。

4) ヨアブは間違いを認める

シェバは信仰者の町であるアベルに逃れました。さすがのヨアブもこの町には手出だしできないだろうと、そこまで計算していた可能性もあります。アベルの町の人たちを人間の盾にして助かろうという計画です。

ヨアブにはシェバの計画が手に取るようにわかります。だからなおさら強引な手段をとろうとしたのかもかもしれません。しかし、今知恵のある女のことばを聞き、自分の間違いを認め新たな提案をします。もし、シェバを引き渡してくれたなら、自分たちはなにもしないで町から引き揚げる。そのような条件です。

2 アベルの町の人々の決断

1) 信仰

さあ、今度はアベルの町の人たちが決断する順番です。選択は二つ一つ。シェバを引き渡さないで、あくまでもダビデの敵となるか。それともその反対に、シェバを差し出してダビデの側につくのか。いずれか一つを決めなければなりません。シェバが町の中に隠れることができたということから、ヨアブが来るまでは町の少なからぬ人たちがシェバを支持していたものと想像できます。そんな状況なのに、女はヨアブの提案を聞き即座にシェバを差し出すと約束しました。約束をするからには、町の人たちを説得するそれなりの算段があったはずですよ。いったいどんな算段があったのでしょうか。

22節に「この女はその知恵を用いてすべての民のところに行き」説得したと書かれています。かつて、町に試練が降りかかった時、

信仰によって神の知恵をいただき、救われました。今もう一度町の人々は、神の知恵を語るこの女性のことばに耳を傾け、何が正しいことであるかを考え、その結果、シェバを差し出すという決断をします。

どうしてそのような決断をしたのでしょうか。そうしなければヨアブにやられてしまう。それしか選択の余地がなかった。そんなふうに見えます。しかし、この町の人たちはどんな人たちでしたか。イスラエルのうちで平和な、そして忠実な者と言われ、イスラエルの母である町、主のゆずりの地とさえ言われた人たちです。目の前の目に見える現実だけを見て判断したのではない。目には見えないけれど、神の真理はどこにあるのか、そこに目を留めて判断しました。

2) 油注がれたダビデ王にそむいたシェバ
決め手はヨアブのことばの中にあります。21 節。「そうではない。実はビクリの子で、その名をシェバというエフライムの山地での男が、ダビデ王にそむいたのだ。」

ダビデは主に油を注がれたイスラエルの王です。ダビデ自身まだ若かった時、自分の上司であるサウルに殺されそうになるほどのいじめを受けたのですが、そのときでさえ、「主に油注がれたサウル王に手を出すことはできない」と告白していました。それほど、主に油注がれるという事実は重かったのです。どんな理由であれ、油注がれた王であるダビデにそむくことは、神にそむくことと同じです。シェバには真理がありません。シェバをかくまひ続けるなら、自分たちは罪を犯すことになる。そうすればわざわざはこの町を襲ってくる。それでシェバの首をはねて城壁から投げ落とすことに決めました。

3 ゆずりの地は滅ぼされない

残酷な話に聞こえます。でも思い出すべきです。聖書が残酷だという前に、私たちは何をしてきましたか。心の中で平気で人を殺し、やってはならないことをこそこそと隠れてやり、人を押しのけてでも自分さえ楽しければそれでよい。そんなことしか考えていなかった。そのあげくに、油注がれた方であるイエス・キリストを十字架につけて殺したのです。考えてみれば私たちは残酷なことを平気でやっていたのです。

それなのにどうして今生きていられるか。理由は一つ。神が赦しの道を備えてくださったからではないですか。神が忍耐してくださっているからではないですか。今ここに座っていられることは実は神の恵みであった。それが十字架の恵みであったのに、いつの間にか忘れてしまうのです。信じて救われた者でさえ、不安になります。罪の赦しをいただいているながら、なお罪から離れられない自分を知って神は赦してくださらないと不安になる。

でも今日なんとやっているか。「主のゆずりの地はぜったいに滅ぼされてはならない。」これが神のご計画です。そのことをはっきりと証しするために、シェバの首が城壁から投げ落とされました。そこまでして、神は主のゆずりの地に私たちを招きたいと願っています。誰がそのゆずりの地に招かれているのでしょうか。良い人ですか。でもそんな人はだれもいません。「私は正しくない」と悲しんでいる者、その者こそが招かれています。ですから、その救いの御手をしっかりと握っていただきたいと願います。